

論文の内容の要旨

論文題目 「分離」と「連結」の概念を用いた都市住居の変遷に関する研究
—台湾台南市でのスタディー—

氏 名 謝 宗 哲

研究背景と目的

- 都市住居は都市で生活する人々にとって最も長い時間滞在する建築の型であり、都市を構成する基本要素でもある。
- 都市住居は都市の空間形式を左右し、都市の風格やイメージの決め手となっていると言えよう。
- 研究の目的は都市の基本的な構成要素である都市住居を分析し、その空間形式の変容を解明することによって、変遷を見極める。

研究対象

- スタディーの対象には、台湾においてもっとも歴史の古い都市である台南市に散在する都市住居を取り上げる。
- 1600年代から今までの400年余りにわたって、歴史は浅いが、様々な国に統治され、多層的な都市文脈を形成しているのがこの町の特徴であり、本論文において取り上げた理由でもある。

第一章 住居論—都市住居を考察する認識論として

「住居」について

- 生活という中身を忠実に反映する住むための機械である。
- 常に社会／世界とインタラクトし、様々な文化的かつ社会的な再生産を果たす社会性をもつ「メディア」であると考えられる。

「個室論」を取りあげる理由

個室という個人空間 (individual space) はプライベートな領域かつ完結された個人の生活行為が発生する「中心」的な存在と考えられる。

- 都市住居はよく都市という空間を構成するユニットとして捉えるに対して、本論文では

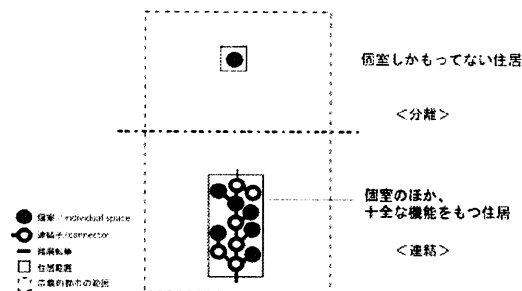
都市住居を「個室」と「非個室（連結子¹—個室以外の共用空間）」の集合体とみなし、論述の中心とする。

「変遷」に対する見方—個室空間構成における「分離」と「連結」

- 「住居」の変遷 — 歴史／社会の流れにつれて、内部の空間単位は外部からの影響か内なる突然的な変化による「個室空間構成」が見られる相対的「分離」か「連結」の関係と見なす。

「分離」と「連結」の概念を説明するモデル

- 「分離的」の定義—連結子が少なくかつ領域深度が浅い状況。
- 生活において、独立性が侵害されなく、比較的自由に都市と接触するのを「分離的」とみなす。その反対方向に進む場合は「連結的」と考えられる。



第二章 領域／境界論 都市住居を考察する方法論として

領域論や境界論を考察し、「領域」と「境界」に定義付けを行ない、境界条件論と領域深度のグラデーション・パターンを取り入れ、「領域深度」の策定方法を作成する。

「領域」と「境界」について

について

- 領域—壁に囲まれたり、底に覆われたり、地形（床の段差）によって決定された空間範囲と指すものであると考えられる。
- 境界は領域と領域を媒介し、相互の関係を決定づけるインターフェースであり、「何らかの交通を制御するもの」と捉え、領域の間の「関」として制御する役割をもつものと位置付ける。

「領域深度」と「グラデーション・パターン」について

- 領域深度 (territorial depth) とはN.J.Habrakenの研究「空間の階層性」による概念である。
- 空間領域の内外関係、空間単元の境界、開放／閉鎖の具合などが判明し、都市との接触の度合いが分かる。

¹ 個室を主体とすれば、他の日常的な空間、例えば廊下、居間、トイレ、食堂、台所、庭などはいわゆる「連結子」となる。

第三章 台南市都市住居の変遷の経緯

安平集落、五条港／大街、末広町店舗住宅、崇誨国民集合住宅

第四章 台南市における都市住居の分析

領域深度グラデーション・パターン図に基づいて、各住居の「空間構成図式」として類型化した。

分析結果

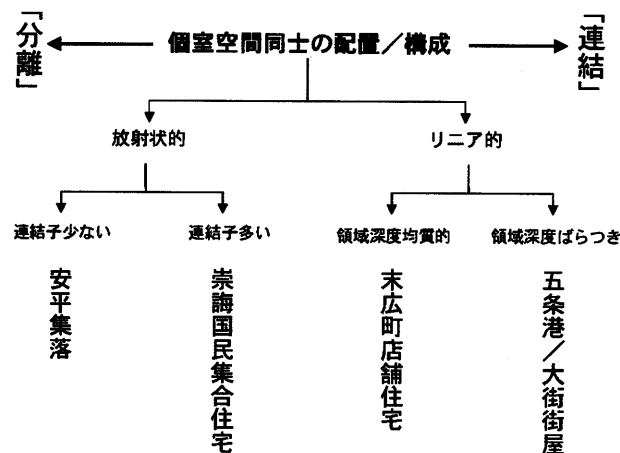
a. 個室と都市の関係に関して、「連結」の順は、

(個室の領域深度分布から判断する)

安平集落 , 五条港/大街 , 末広町 , 崇誨国民住宅

- 都市化の程度によって、個室はだんだんと都市から離れていくという傾向が見える。

b. 個室の間の独立性／分離的な存在という観点から見れば、



結論

- 「空間の階層性」という概念に基づき、境界／領域理論を援用し、「領域深度のグラデーション・パターン」という方法で台湾の台南市の都市住居を考察した。
- 台湾台南市における都市住居の調査資料を収集し、入手できるデータをもとに、歴史的な都市の発展にそった都市住居のデータシート集を作成した（基本図面、境界及び領域深度の分布など）。
- 空間構成を図式化することによって、台南市における都市住居の変容を「個室＋非個室」のモデルで記述した。
- 「分離」と「連結」の概念を用いて、時間軸にそった台南市都市住居の空間構成の変容を個室空間相互の「分離または独立」／「連結または依存」という視点を軸に、従来と異なる視点から都市住居を読み直す新しい方法を提案した。

今後の課題

- 領域深度という概念による方法論に関して、厳密さに欠けているとの指摘も考えられるが、そもそも「領域」という感覚自体が精密かつ容易に定量化されるものではないので、あえて本論文では「定性」的な考察方法を提案した。領域に対するこうした感覚を如何にうまく定量化するかというのが今後の課題であると考えられる。
- 都市住居の図式化過程をグラフ理論に基づいて、さらなる洗練されたモデルに作成すること。

論文の内容の要旨における画像

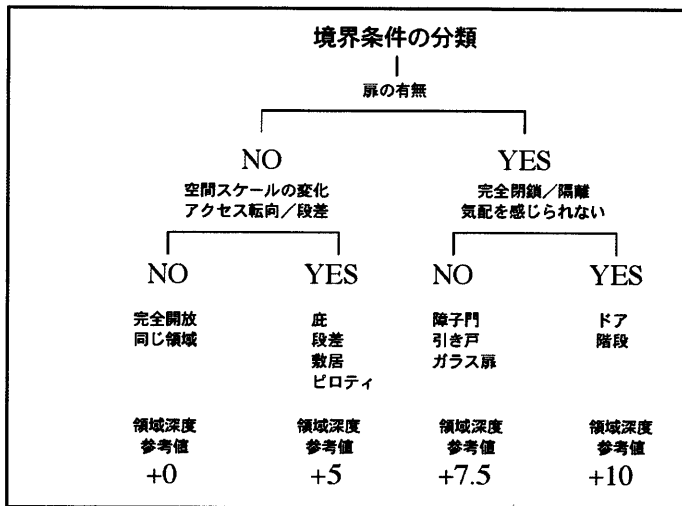
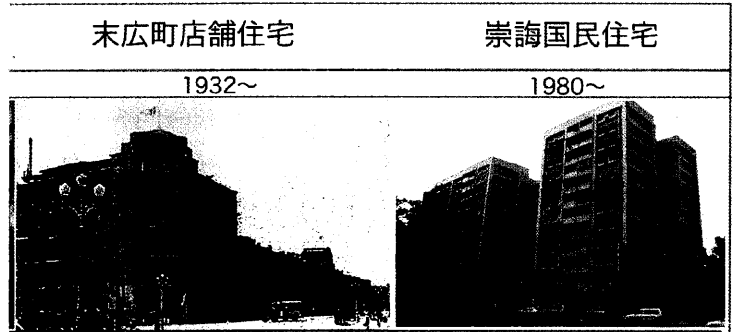


表 1 領域深度の増幅原則



市都市住居の基本図式

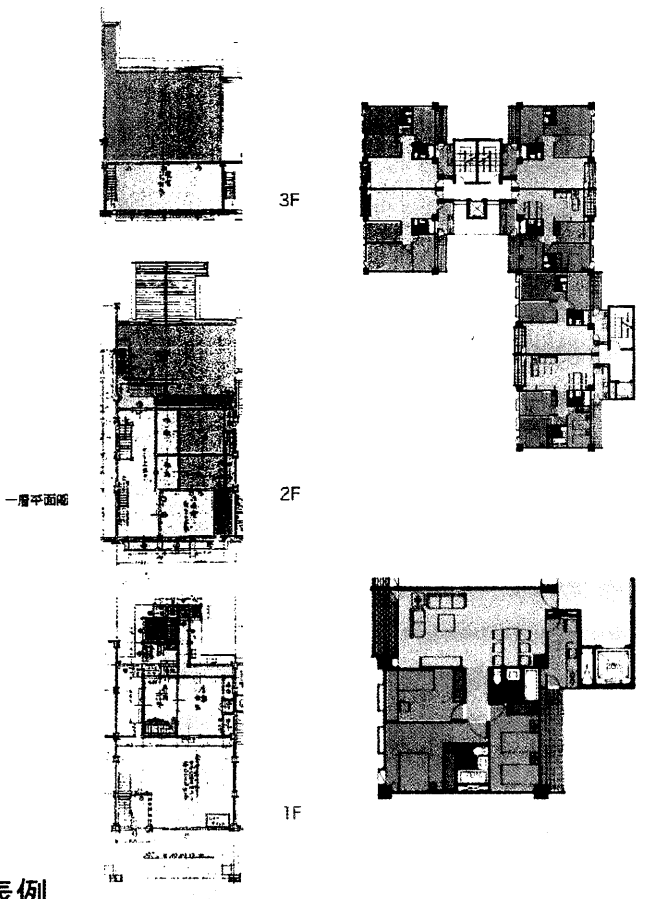
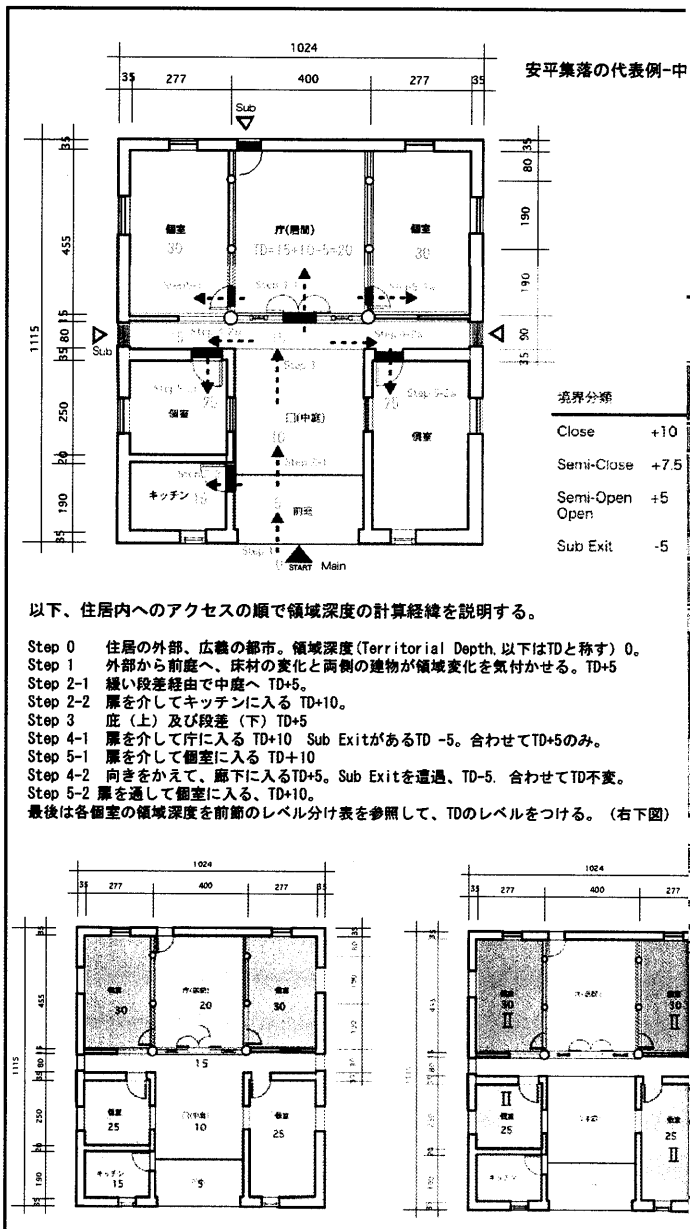
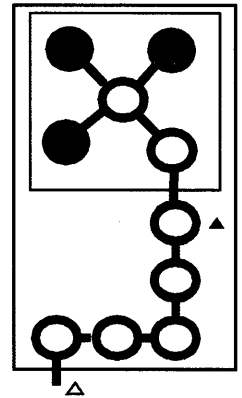
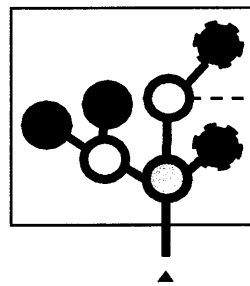


図 1 領域深度のグラデーション・パターン作市住居の空間構成図式